



だいや川通信

今市の水を守る市民の会

第31号

2011年7月27日(水)

3.11は遠くにあらず

－「今市地方震災史」の活用を－

3.11の光景を私達は今日まで何度眼にしたことだろうか。千年に一度という天災に遭遇してしまった私達の国、日本。信じられない光景を現実として受け入れねばならない状況にさせたのは、現地から届く生々しい中継映像にあった。その映像は62年前の今市地震の被災状況を想像させ、決して他人事とは思えぬものだった。

3.11以降、日本列島では地殻の変動が生じ、どこで地震がおきても不思議ではないようだ。震源地が松本の6月30日の地震も、その一例ではないだろうか。せないことだが、今市地震に再び襲われる心配のあることも、これからは常に意識していくことが公私共に必要になってくる。

当会の前身である「今市の水を考える会」の発足は、思川開発事業計画により取水される今市の水問題を懸念したものであったが、その中には行川ダム予定地下流の金沢山が今市地震の震源地だったことも大きく影響している。

昭和24年、長畑の自宅で地震に遭った前代表:福田健彦氏(故人)は「考える会」の定例会で、行川ダムサイトの基盤のもろさを常に指摘されていた。福田氏はかつて今市市役所の企画室長の要職にあったので、今市扇状地の地下水や行川ダム予定地附近を通っている断層について、研究者から多くの指摘や助言を受け、一貫してこの事業の危うさを主張されていた。

平成12年、水資源公団(旧)は大谷川取水を正式に中止したが、ここに到るまでには先達である福田氏の活動が大きく功を奏していたことはまぎれもないことと思う。その中の一つをここに紹介したい。それは当時の今市町が地震後すみやかに作成した「今市地方震災史」の内容を再確認することであり、その復刻を強く市に要望することだった。この書は福田昭夫市長時代に完全な復刻版として市から発行されたので、ご存知の方もあろうと思う。

今、私達ははからずも東日本大震災に遭遇してしまったが、今後発生するかも知れない今市地震の防災に、貴重な記録であり、資料でもある「今市地方震災史」の活用を進めてはどうだろうか。

今回の震災について、「人間は自然を征服するのではなく、うまくつきあっていくこといおきべが必要。それが減災という考え方」とした復興構想会議の五百旗頭委員長の報告は、多くの方が支持することだろう。この島国では、少なくとも二十世紀半ば過ぎまで自然と共生する暮らしが各地で営まれてきた。時間はもう残されていないのかもしれないが、蓄積されてきたその知恵を今急いで探し出し、継承しておかなければその活用はもう永久にできなくなる。前号に「日本中が壊れていくような予感」と記してから三ヶ月もたたぬうちに、それをはるかに超える地震・津波・原発事故に襲われてしまった現実。惨状はいっこうに改善していないが、復興の道筋をもっと早めるよう、東日本に住む私達が強く声を上げる時期に来ている。先人の知恵を生かす、その土地土地の自然と共生する「減災」が、今後大きく求められる時代となっていくことは確実だ。

3.11を契機に、私達の親達が体験した今市地震の記憶を次の世代に語り継いでいくために、「今市地方震災史」を手にとってみられる事をおすすめする。

(塚崎 庸子)

目次:

3.11は遠くにあらず	1
真竹のタケノコ	2
川むしたんけん隊	2
シモツケコウホネ	3
今市の湧水 OpenGuigerProject 活動報告	4

お知らせ

次回の定例会
8月24日(水)

日光市民活動支援センター
午後1時～2時



古賀竹のタケノコ...

真竹のタケノコの皮をむきながら、数年前
亡くなった友を想いつかべた。多趣味な人
その中でも、水力の小電力発電に結構
ハマっていた。地元はむろんの事、長野県
の大町の方まで行ってた。
今、福島原発の事故で安全性の不安
から、自然エネルギー発電が注目されて
いるけれど、どうなのだろう？
事故の重大さを考えれば原発はNOだ
けれど、果して今まで電気と言う文明に
頼りすぎた生活を、人々はどれだけ我慢
で暮るのだろう？... 今友がいたら、
何んて言っただろう？... そんなことを考え
ながらむいたタケノコで、煮物とみそ汁
を作った。今年のタケノコは、なんだか小さ
しよっぱくて、ホロ苦い味がした。

追

この間、竜飛岬の高台に建つ風力発電
の風車を見てきた。
日本海の海風を受けゆったりと回る羽。
風ぎの海を見てみると、3/4の津波は
夢のようだが、現実であって、自然は
時々人間に途轍もない牙をむく。



隅

川むしたんけん隊

【6月4日(土曜日)、NPO法人 なんとなくのにわ サイエンス・カフェに協力】



今回の「川むしたんけん隊」は6月4日、明神駅そばの行川で実施しました。いつも天気が心配なこの時期の「川むし」。今年は天候に恵まれ、気温 22℃、水温 18℃絶好の川遊び日和でした。

小中学生7名、大人13名が午前10時に集まりました。あいさつや参加者の自己紹介に始まり、塚崎さんのお話を聞いて、午後10時20分から川に入りました。はじめはおっかなびっくりの子どもたちも慣れるにしたがって大胆になり、予定の1時間をオーバーして、大人も子どもも川虫の採集に熱中しました。近くの水路でアカハライモリを見つけた子ども、川で泳ぐシマヘビと目が合ってしまった大人など、いろんなハプニングもありました。

どんな虫がいるのかな...



午後11時40分頃から、集まった虫や魚などを分類し、塚崎さんから説明を聞きました。ヒラタカゲロウ、マダラカゲロウ、モンカゲロウなどのカゲロウ目、ヒゲナガカワトビケラ、ムナグロナガレトビケラなどのトビケラ目、オオヤマカワゲラなどのカワゲラ目の幼虫がたくさん見つかりました。オニヤンマやガガンボの幼虫もいました。昆虫以外に、ハヤ、フナ、ドジョウ、シマドジョウなどの魚たち、トウキョウダルマガエル、ニホンアマガエルなども見つかりました。カジカガエルの美しい声も聞こえていました。

昼食後も、子どもたちが川や水路でいろんな遊びを見つけ、楽しい時間が過ぎ、午後2時に解散。みなさん、お疲れさまでした。(T)

シモツケコウホネあれこれ

シモツケコウホネと関わり始めて早いもので、7年近くが経とうとしている。今年の6月には「シモツケコウホネと里を守る会」(以下「里を守る会」と略す。)の活動が読売新聞社の「栃木県自然保護功労賞」を受賞した。コウホネ保全の活動への社会的認知度も高まって来たといえるのだろう。

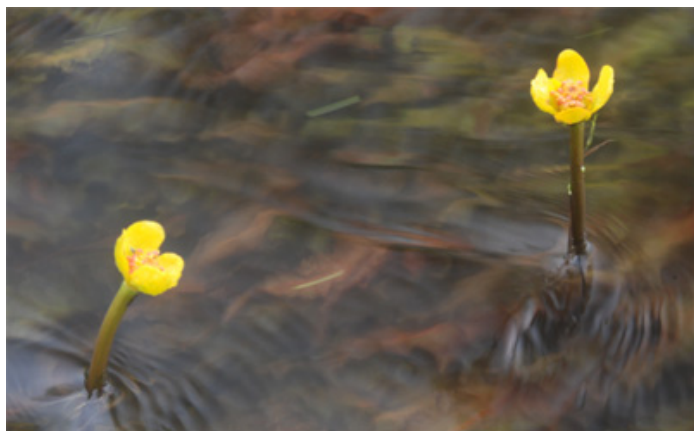
だがこうしたこととは裏腹に、いま、私たち「里を守る会」が感じているのは、種の保全ということが一筋縄ではいかない、難しいもののような漠然とした不安感である。もしかしたら私たちは事態を甘く考えすぎていたのかもしれない……。

平成17年10月に私たちは小代の圃場整備事業に対してコウホネとそれを取りまく地域全体の貴重な生態系の保全を求めて意見書を提出したのであったが、当時は私自身、個人的には素人考えでコウホネの保全そのものは自生地をそのまま残してもれればそれほど困難なことではないだろうとタカをくくっていた。

当時は、毎年水路の掃除の時に一輪車で捨てるほど除草しても次の年には復活してしまうほどで丈夫な草なのだという話を地元の何人もの方たちから直接聞いていた。したがってコウホネも大事だが、そればかりでなく他の生物もできるだけ多く守っていくということに自分の関心の大部分が移っていたというのが実情だった。

ところが、平成21年から22年にかけて自生地付近の工事がおこなわれてみるとコウホネを取り巻く状況は次第に厳しくなってきた。一言で言えば、水路の環境が激変したということなのだろう。上流の水路の工事のため、コウホネの水路に水が来なくなり、コウホネの水路に行川からの水を直接ポンプで汲み上げる事態となった。そんなことで昨年は花の数も激減した。しかし7月ぐらいから少しずつ花も多くなり9月にはずいぶん元気になってきて、今年に期待が繋がれた。

平成22年から23年にかけては、残された上小代地区の工事が行われた。今年は水路の水の汚れが目立ち、一時は水中が何も見えないほど真っ黒な泥水が流れてくる日々が何日か続いたりもした。5月・6月の圃場整備も終わった後にもそうしたことが何度かあり、最近になって遅まきながら気付いたのは、行川の上流での河川改修工事の影響ということだった。水質悪化の原因の一つがそこにあったのだ。



以前であれば行川からの水がコウホネ水路に入ってくるまでには、何枚もの田んぼを通過し、ゆっくり、ゆっくり流れてきて、それに付近の湧水もたくさん入った上でのことであった。だから上流の河川の水質などそれほど関係していなかったのかもしれない。ところが圃場整備によって用水と排水がきちんと分けられると行川の水は用水を通してコウホネ水路に直接流れ込んでくるという状態になったということなのだろう。ちょっと考えればすぐにわかるこんなことに気付くのにずいぶんと時間がかかってしまっているのは、門外漢の悲しさというものか。幸いこの河川工事そのものは今年の9月頃までは行川漁業組合との約束もあり、川底の工事はやらないことになっているようで、このところ水質は格段に良くなって来ている。

それでも「里を守る会」代表の柴田由子さんに言わせると水路の水質は激変しているようで心配だという。7月の花の数は昨年よりは多くなって来ているものの、工事以前の三分の一にも達していない。自生地水路でコウホネと一緒に生育しているナガエミクリは毎年刈り取りを必要とするほど旺盛な繁殖力を示していたのだが、工事以後、どうしたわけか、水中に葉をだだよわせているだけで立ち上がって花を咲かせることはない。また水路からの水を引き込んでいる柴田さんのお宅の池の鯉や金魚がこのところ何匹も死んでいるとのこと。

私などの目から見ると以前と変わりなく見える水路の水だが、何十年と毎日この水路を見続けてこられた方たちにはまた違ったものが見えるのだろう。そういえば数年間コウホネの写真などを撮ってきた経験からするとファインダーの中のコウホネの花茎が、心なしか細くなっているようにも感じられる。水底の地質の変化もあり、コウホネの栄養状態も少し心配である。

専門家の皆さんを含む多くの方たちの英知が結集されて、何とか、以前の水路に近い環境が取り戻されて、さらにコウホネが小代の水路に一面に咲き乱れる日が来ることを祈りたい。9月頃までは咲いているので本誌をお読みの皆さんにもお暇な折に今年も小代に足を運んで、コウホネを観察していただければありがたいと思う。(森)

活動報告

- 1月26日(水) 定例会 今年の計画
- 2月23日(水) 定例会 ゆったりウォーク実施場所検討
- 3月23日(水) 定例会 原発の話など
- 4月27日(水) 定例会 川むしたんけん隊(6月)の計画
- 5月25日(水) 定例会 役割分担
- 6月4日(土) 川むしたんけん隊(明神駅付近の行川)
- 6月22日(水) 定例会 次の会報の内容確認
- 7月27日(水) 定例会予定

だいや川通信
第31号



郵便振替口座

00140-4-535550

連絡先

〒321-1102 日光市板橋1732-1 森方

今市の水を守る市民の会

0288-27-2183 (8時~17時:森)

0288-26-3324 (17時~21時:塚崎)

<http://somesing.net/daiyagawa/>

今市の湧水

10年前くらいに水文学専門の先生に「日光に降った雨が地下にしみ込み、今市の扇状地に湧き出るまでの時間はどのくらいですか?」と聞いたことがある。答えは「4年くらい」だそうだ。もっと深い地下水は何十年・何百年というものもあるが、現在今市に湧き出て流れている水は、日光に降った雨が4年かけて出てきたものだそうだ。そう考えると、私が日光地区で飲んでいる水と今市で飲む水は元が同じでも時差があるんだなと不思議な感じがする。

地球全体では温暖化などの影響もあり、水不足が懸念されている。日光に住んでいるととてもそんな実感はもてないが、このように水に恵まれているところに住めるのは幸せな事だ。この環境大切にしなければと思う。(毛塚)



Open Geiger Project のこと

福島での原発事故以来、放射線量が気になる日々が続く。とりわけ日光市は栃木県内でも比較的高めの数値が出ている上に、ホットスポット的な場所もあるようで要注意のようだ。

いたずらに不安がってみても仕方がないことで、まずは判断の基礎となる線量を計測するのが基本かと思うのだが、いかんせん計器が高価で手に入りやすく、個人的に所有するというのはなかなかむずかしい。そこで自分たちで安価で簡便な計測器を作ってしまうというプロジェクトがあるので紹介する。題してOpen Geiger Project。インターネットで検索してもらえれば、すぐにアクセスできる。 <http://opengeiger.com/>

個人的にこのサイトの管理人から試作品の一つ送ってもらい、それを弁当箱程度の大きさのプラスチックの箱に入れて使っている。先日、ボランティアで関わっている宇都宮市内の茶畑の測定を行ってみた。絶対値としての精度がどの程度かは不明だが、高いところと低いところがどのように分布しているか、また一番茶刈り取り前と、刈り取り後の違いなどがわかって大変役に立った。現在進行中のプロジェクト。誰もボロもうけできない形で進めているようなので、興味のある方はのぞいてみるとよいのでは。

それにしても、技術的には優秀であるはずの日本の企業、工場、技術者たちは切実な需要に答えて、どうして安い簡便な計測器を作ろうとしないのだろうか。疑問を乗り越えて怒りのようなものすら感じている昨今である。(森)

編集後記

我が家の戸棚の整理をしていた日曜の午前、隅さんが本通信の原稿を届けてくれた。私は古い急須を包んだ古新聞を開き、広告を眺めていた。なんとそこには、水車で発電し家庭の電灯を点灯する仕組みが描かれ、「日本形水車応用発電機」とある。大阪の会社だ。ちぎれていて、新聞の発行元はわからない。日付は大正4年(1917年)5月4日である。江戸の雰囲気を残す挿絵がなんともよい雰囲気だ●いただいた原稿は水力発電の話で始まっていた。偶然の一致に驚いた。「自然エネルギーを使おう」という

百年の時を経たメッセージだと思った。黎明期、電気はその場で作り使うものだった。技術が進歩し、巨大な発電設備が作られ配電の仕組みができたが問題も増えた●もしかして、あと百年が過ぎると電気は家で作る時代に戻っているかもしれない。電気を地域で融通し合う仕組みが作られるのだろう。各家庭に置かれた太陽電池やバイオ発電などが活躍するだろう。市営や県営など地域の小規模水力発電所がたくさんできるかもしれない。電力会社が言う「電力不足」の脅し文句を聞くと、ついそんなことを空想してみたくなる。(T)

